

「あしたも、みんなで遊ぼうね」

〜子どもたちの「いきいきしさ」に生かされて〜

安達敬子

今日も、道端に咲く秋桜^{コスモス}は、人や車の通る風に、花首を持ち上げて揺れています。秋桜の咲く季節、園庭で遊ぶ子どもたちの姿を見ると、私にとつて忘れられない十年前のあのころが思い出されます。「いきいきしさ」とは、生きとし生けるものの魂が、近くても遠くにいても、互いにいきいきしく揺れ、響き合うことだと子どもたちから学びました。

「いっしょの保育」の砂場^ゴで

勤務校である知的特別支援学校の幼稚部では、一九九二年度から十二年間、障がいのある子どもたち七人くらいの集団に、障がいのない近所の三歳児

の子どもたち三〜七人を受け入れてきました。私たちはそれを「いっしょの保育」と呼んでいました。青空の下、東京ドームを望む高台にある園庭は、子どもたちのにぎやかな声に包まれています。四歳児のM君は入園時、手足の汚れる活動が苦手でした。保育室では、分厚い本をめくり続け、物を投げたりかじったりなど、一人で遊ぶことに耽^{ふけ}っていました。外遊びでは、探索活動が多く、草花をむしっては、それらを口にすることが時どき見られました。本人の興味・関心に寄り添いつつ見守り、遊びが広がるよう働きかけていくと、泥んこ遊びが大好きになり、集団へも入っていけるようになりました。

九月半ばの蒸し暑い日、仲良しの A 子ちゃんと J 君、T 君は、土砂をバケツで運び、砂場で大きな山を作っていました。地下鉄を見下ろせる金網の向こう側には、秋桜が密集して生えていて、花茎は網目をくぐって園庭側へ斜めに顔をのぞかせています。子どもたちが近くを通ると、ピンク色の花首は、まるでおじぎをしているかのように、ゆっくりと、そして流れるように揺れていました。

頭をつき合わせて山を固める三人の額から、汗がポタポタ落ちて、山の斜面に染み込んでいきます。そんな様子を、遠くの木陰から M 君は、じっと見つめていました。(きっと、砂場に駆け込むだろうな) と思ったその瞬間、M 君はもう走り始めていました。玄関の前にいた私は、慌てて M 君の背中を猛スピードで追いかけてました。そして、大きく息を吸って「M 君とア、ダ、チ、怪獣がそっちへ行くよー」と叫び、周囲のみんなに予告したのでした。びっくりした子どもたちは、砂場で尻もちをついて、「逃げろー」と

言って、隣の滑り台へ隠れました。M 君は、ここぞとばかりに、わが物顔で砂山のとっぺんを蹴り上げます。私も首を左右に振って髪を振り乱し、雄たけびを上げながら地団駄を踏み、両手で砂をまき散らしました。滑り台へ逃げた三人は、上からじつとこちらに熱い視線を送っていました。崩れた砂山からプリンのカップが出てくると、M 君は砂場の真ん中にどっかりと座り込み、カップに土砂を入れ始めました。そして、M 君の顔の横で揺れていた秋桜を握り取り、カップに挿しました。

「M 君、すごい」「素敵！ おもしろそう」と言っ
て砂場へ降りてきた三人は、M 君を囲んで、小さな両手で砂場からカップを掘り出します。三人は M 君同様、カップに土砂を入れて、そこに秋桜を挿し始めたのでした。砂場は見る見るうちに、ピンク色と紫色と緑色の花畑になりました。花々は、カップの中でしっかりと立っています。周辺はいつまでも、ほんのりと甘い香りが漂っていました。

その日の給食時、A子ちゃんはM君に、「あしたも、みんなで遊ぼうね！」とまんまるな笑顔で話していました。

幼稚園での遊びの世界はドラマの連続です。障がいのある・なしでは語れない、子どもたち同士との遊びの風景は、何年経っても、その「いきいきしさ」で、私の心を躍らせてくれます。

病室の秋桜

その後、私は原因不明の病気で、急きよ手術をすることにしました。健康だけが取りえだったのに、病気休業を余儀なくさせられたのです。保護者に休む理由を充分説明する余裕もないまま入院となり、クラスの子どもたちと三人のわが子に後ろ髪を引かれる思いでした。年長組の担任をしていた二学期の九月末のことでした。

十時間に及ぶ手術後、胸が締め付けられるほどの不安の重みにもがきました。冷静になって周囲を見

渡すと、横たわる目線の先にあるのは、花瓶の中の秋桜の花束でした。一週間前に子どもたちが園庭の砂場に咲かせてくれたあの花でした。花びらは日に焼けたようなまだらのピンク色で、決して美しいとはいえませんが、病室の白い壁を背景に明るく咲いていました。しなやかな茎の先に一枚一枚の花びらを大きく広げ、凜としています。数日後、いつも部屋を掃除してくれる仲良しの女性が、「この花はね、アダチさんが手術後の昏睡状態の時、お母さんが飾っていかれたんですよ。きっと、家のお庭に生えていた秋桜なのでしょうね。人の手によってつくられた花屋さんの花は、いつまでもこんなふうに立っていませんよ」と教えてくださいました。

女性は、動くことのできない私の代わりに毎日、花瓶の水を替えてくれました。ある時、「秋桜、二週間も経っているのに、こんなに生き生きしているでしょう。私はこの花を見ているとアダチさんに見えてくるんですよ。ほら、土の上ではないのに、

ちゃんと立っていますよ。秋桜は細くて弱々しく見えるけれど、台風で倒れても茎から根が出てきて起きようとするくらい、強い花なんですよ」と説明してくださいました。女性は、私の落ち込んでいく様子に気づき、「いきいきしさ」を秋桜に託してくれていたのです。

「あしたも、みんなで遊ぼうね」

A子ちゃんの母親から便りが届くようになったのは、入院の翌日からでした。はがきの表裏いっばいに、幼稚部の子どもの様子が詳しく記されています。何度も書き直したような鉛筆書きの字を見て、胸が熱くなりました。返事は一回も書けませんでした。が、来る日も来る日も、はがきが届きました。そのうちに私は、はがきを読むのが毎日の楽しみになりました。病室にいながら、A子ちゃんが母親に語った日々の遊びが手にとるようにわかりました。一枚のはがきに、子どもたち一人ひとりの「いきいきし

さ」が染み込んでいました。はがきの最後にはいつも「アタチ先生、『あしたも、みんなで遊ぼうね』と娘が言っています」と書かれ、A子ちゃんのだとどしいサインで終わっていました。(私を待っていてくれる子どもたちがいる!)と思うと、(何とかここを脱出しなければ。病気になんか負けてられない)という気持ちでいっぱいになりました。私は、子どもたちの「いきいきしさ」を頼りにしながら、それを支えに「生かされている」自分を見つけました。

今日もまた、幼稚部の園庭から、にぎやかな声が聞こえてきます。草木の中で秋桜が揺れています。先日、学校の近くでA子ちゃんのお母さんにとり会い、懐かしい話に花が咲きました。中学生になったA子ちゃんは、幼稚部時代の楽しかった遊びを、いまでも家で話しているとのことでした。

A子ちゃんは、将来、保育士になるのが夢なのだそうです。
(筑波大学附属大塚特別支援学校)